

赤ちゃん竜のお世話係に任命されました

登場人物 紹介

オニクス

凶暴な黒ドラゴン。
アスラの要塞の地下で
飼われている。

イシュドーラ

魔族の国・アスラの王太子。
好戦的な性格をしている。
伝説の「壽き手」とされる結衣
のことを聞きつけ興味を持つ。

アレク

リグイドール国の若き国王。
聖竜と共に戦う「盟友」でもある。
優しい見た目目に似合わず、
自ら騎士団を率いる。

ディラン

結衣の護衛の騎士。
アメリアの双子の兄。
剣の腕は確かだが、
ドラゴンがとても苦手。

オスカー

リグイドール国の宰相。
常に無表情だが、国王である
アレクを傍でしっかり支える。

アメリア

結衣のお世話をする侍女。
普段はおっとりしているが、
怒ると怖い。

ソラ

聖竜の子ども。
いずれは魔族から人間を守る、
立派なドラゴンに成長する
らしいが——？

さくちゆい 菊池結衣

ごく普通の24歳。
職業はドッグトレーナー。
聖竜の子どもを育てる
「壽き手」に選ばれ、
異世界に召喚された。

目次

序章	7
第一章	15
第二章	116
第三章	188
第四章	254
終章	282

序章

「父上の具合はいかがですか？」

足早に廊下を歩いてきた金髪の青年は、王の寝室の前で医師に問う。今日が峠だと聞き、戦後処理をしていた戦場から急いで戻ったせいで、薄汚れた緑色の軍服を着たままだ。二十二歳になる彼は、優しげで整った顔に不安を滲ませていた。

そんな彼を見て、初老の医師は、首を横に振ってみせる。

「相変わらずでございます、アレクシス殿下。最善を尽くしましたが、敵将につけられた傷が深く……。陛下が殿下と二人きりでお話ししたいそうです。陛下の傷に障らぬよう、出来るだけお静かにお願いたします」

そう言うと、医師は寝室の扉を振り返った。衛兵がその扉を開ける。青年——アレクが頷き、中に入ると、扉はすぐに閉じられた。

寝室の中央にある豪華な寝台の上で、くすんだ金髪をした、厳めしい男が眠っている。アレクはその様子を目にして、戸口で足を止めた。

医師の言うことを信じたくはなかったが、目の前にあるこれが現実だ。

男の——リヴィドール国王の寝室には、静かな死の気配が漂っていた。

アレクは気を強く持ち直すと、王の寝台の傍まで歩いていき、床に膝をつく。

「父上、アレクシスです」

王の体を労わり、ささやくように話しかけると、王の目蓋がゆつくりと持ち上がった。深緑色の目が動き、アレクを捉える。

「……来たか」

そのたった一言でも疲れたと言わんばかりに、王は大きく息を吐いた。声がかすれていて聞き取りづらかったので、アレクはもう少しだけ王に近付いた。すると王は続ける。

「アレクシス、私の最後の息子……。二人の兄王子を病で亡くした今、お前がこの国の最後の若者だ。アスラ国のいいようにさせてはならぬ」

「心得ております、父上」

アレクは王の右手を取り、彼を安心させるためにはつきりと答えた。

アスラ国は、古来より人間と敵対する魔族が作った国だ。人間側の大国であり、その国と隣り合っているリヴィドール国は、たびたび戦禍にさらされていた。

王がこうして床についているのも、ほんの二日前に終わった戦のせいだ。王は兵達の先頭に立ち、多くのドラゴンを味方につけて戦場に赴いた。聖竜エルマーレに乗った彼は、敵将と一騎討ちをして、からも勝利した。だが、その時に大怪我を負ったのだ。医者はまだ長くないと言っていた。

王はしばらくアレクを眺めた後、僅かに眉尻を下げる。

「お前は優しすぎる。それだけが心配だ。王になった後でよいから、良き妃を迎えなさい」

「はい。母上のような方を見つけることを、お約束いたします」

アレクが答えると、王の目元がふつと和らいだ。

「それでいい。それから、エルマーレももう長くないだろう。産卵直後だというのに無茶をさせた。すまないことをしたと思っている」

「父上……。聖竜は喜んで共に旅立ちました。きつと後悔されてはいないでしょう。それにアスラ国を撃退したことで、我が子を守れたのですから」

「そうだな……。アレクシス、国のことも、あれの子のことも頼むぞ。ドラゴンの導き手を召喚し、あれの子を正しく導いて頂くのだ。伝承の通りに」

「分かりました、父上。必ずやそのように」

アレクの返事を聞いて満足したのか、王はゆつくりと目を閉じた。握っていた右手から力が抜けたことに気付き、アレクは寝台にすがりつく。

「父上？ ……父上、父上！」

呼びかけても返事が無い。

異変に気付いた医師が飛ぶようにやって来て、診察を始める。

——その日、リヴィドール国王の訃報が国内を駆け巡った。

菊池結衣が宿舎の外に出ると、辺りはまだ薄暗く、空の端には星が見えていた。

彼女は小さく欠伸をし、眠気をこらえて宿舎の扉を閉める。そして朝靄の中、短い黒髪を手櫛で整えながら、向かいの建物を目指して歩き始めた。

ここは日本のある山の中に立つ、犬の訓練所だ。

夏はもう終わりに近付いているので、朝は結構冷えて、冷え性の身には辛い。これさえなければ騒音を気にしないでいい最高の立地なのにと、朝になる度に思ってしまう。

結衣はドッグトレーナーをしている。犬が人間と生活を共にするために必要なしつけを行うのが仕事だ。この訓練所では問題を抱えた犬達を預かり、ドッグトレーナーがそれぞれ担当の犬をしつけている。

結衣は高校卒業後にドッグトレーナー養成学校に入り、一年近くかけてライセンスを取得した。独立開業を目指している結衣は、まずは経験を積もうと、この訓練所に就職したのだ。

食事付きの宿舎がある代わりに、給料はお小遣い程度しかもらえない。だが、上司や先輩達のようなドッグトレーナーになりたいと夢中でやっているうちに、気付けば五年目を迎えていた。

基本的なノウハウは身に付けたし、もっと給料の良い所はないかと、転職先を探しているところだ。それというのも、この間実家に帰省した時、いつまで仕送りさせる気だと親に冷たい目で見られてしまったのだ。

結衣は親の顔を思い出して溜息を吐き、中庭を横切って、宿舎の真正面にある犬舎へ向かう。自分の朝食の前に、担当している犬に朝食を与えがてら、しつけをしなければならぬのだ。

犬舎の前で気持ち切り替えると、結衣は鉄製の重い扉を押し開けた。そして電気を点け、中の犬達に向かって明るく挨拶をする。

「みんな、おはようー！」
そして同僚からどنگりみたいと言われる大きな目で、さっと辺りを見回した。
入り口から真っ直ぐ伸びるコンクリートの通路。その横には、一頭分ずつ壁で仕切られた檻がある。檻の中には色々な種類の犬がいた。

結衣は通路を進みながら檻の中を覗き込んで、犬達の様子を見ていく。
床に伏せたまま耳だけ動かしている犬、鉄格子の傍まで歩いてきてこちらを様子見する犬、檻に前足を掛けて吠える犬など、様々なタイプがいる。時には激しく吠え立てる犬もいるが、この周辺には人家がないので気にする必要はない。

生活するには不慣れな立地だが、お陰でのびのびと訓練することが出来るのだった。
犬達に声をかけつつ、結衣は健康状態を観察していた。問題があるように見える犬はいなかった

ので、そのまま一番奥の檻へと歩いていく。そこには結衣が訓練を担当しているゴールデンレトリバーのラッキーがいるのだ。

「おはよう、ラッキー」

結衣が声をかけると、ラッキーは鉄格子から離れて激しく吠えた。

吠え癖がひどいという理由で、最近ここに預けられたラッキー。だが、少しばかり警戒心が強すぎるだけのだろう。

そんなラッキーを安心させるように、結衣は優しく微笑みかける。そして早く吠え癖を直して飼い主のもとへ帰してあげようと思いつきながら、檻の鍵を開けた。



リヴィドール国王の死から二ヶ月が経った。

雲一つない晴天に恵まれた朝、白い石造りの神殿は、慌ただしい雰囲気にも包まれていた。

アレクは紺色の上着と白いズボンという正装姿で、赤いマントの裾をなびかせながら、神殿の廊下を歩いていく。

時折、儀式の道具を運ぶ女性神官達とすれ違う。白いシャツとスカートという衣装に身を包んだ彼女達は、アレクに気付くと端に避けて頭を下げる。

忙しそうな神官達を横目に、アレクは高揚した気分で神殿の奥を目指した。

この神殿は、聖竜を信仰する聖竜教会の本部だ。王城の城壁内にあり、限られた一部の者しか出入り出来ない。だが、幼い頃から出入りしていたアレクにとっては、とても馴染みのある場所だ。

彼が神殿を頻繁に訪れていたのは、聖竜エルマーレに会うためだった。しかし王の死後、まるで

後を追うかのごとく、エルマーレも亡くなった。優しい祖母のような存在だったドラゴンの死を思い出し、アレクの心は痛んだが、首を振って気を取り直す。

今日は特別な儀式を行う日なのだ。沈んだ気持ちで儀式を行ったら、亡きエルマーレが怒るだろう。

「殿下！ アレクシス殿下、お待ち下さい！」

ばたばたという騒がしい足音と共に、長い黒髪を持つ青年が追いかけてきた。三十二歳という若さで宰相を務めるオスカーである。

足を止めて振り返ったアレクは、今日もいつもと同じ黒衣を身に着けている彼を見て呆れた。

「おはよう、オスカー。今日みたいなハレの日くらい、黒衣をやめてはどうだい？」

リヴィドール国では、王の死後一年間は喪に服すため、黒衣を身に着ける習慣がある。アレクもこのところずっと黒衣を着ていたが、今日は特別な祭事を行うので、正装を身に着けていた。だが、オスカーは今日も真っ黒いローブ姿だ。喪中とは関係なく、普段からこの姿なのである。

「おはようございます、殿下。ですが、私にとってはこれが正装ですから」

普段、体力よりも頭を使う仕事をしているせいか、オスカーは乱れた呼吸を整えながらそう返した。

折に触れて明るい色合いの服を着るよう勧めてきたアレクにとって、オスカーの返事は予想通りだった。仕方ないなあと思いつきながら、それ以上服に口出しするのはやめる。その代わり、未だに幼少期からの呼び方をするオスカーを、やんわりとたしなめた。

「オスカー、私はもう殿下ではないよ」

「はっ、申し訳ありませんでした、アレクシス陛下。ですが、どうかお待ち下さい。そんなにお急ぎにならずとも、儀式は逃げたりいたしません！」

「楽しみなのだから仕方ないだろう？ お伽話おとぎばなしやエルマーレ様のお話に出てきた、ドラゴンの導き手。あの伝説の存在に会えるんだ」

アレクは、はやる気持ちを抑えきれずに再び歩き出す。オスカーはその左斜め後ろにつき、ハンカチで汗を拭ぬぐきながら後を追った。

「お気持ちは分かります、陛下。ですが、今までの導き手の中には他の世界の住人もおりました。鱗うろこの肌をした方や、魚のような水かきを持つ方など……。今回も、どんな方がいらつしやるか分かりません。何かあってからでは困るのです。ですから準備は万端に、護衛も大勢用意しなくては」

「駄目だ、オスカー。そんな真似をしては、導き手を怖がらせてしまう。第一、聖竜が選ぶのだから、間違いない起きはしない」

アレクに切り返され、オスカーは口をつぐんだ。聖竜は人間を守る存在であり、人間に害を与えないことはないと、リヴィドール国の人間はよく知っている。

再び前を向いたアレクは、憧れを込めて呟く。

「今度の竜の導き手は、いったいどんな方なんだろう。早くお会いしたい」

導き手の召喚を早めるための儀式の間、その入り口である大扉が、教会兵の手で開けられる。

アレクは期待に胸を膨らませ、扉の向こう、光溢れる場所へと一歩踏み出した。

第一章 ドラゴンの導き手

名前を呼ばれたような気がして、眠っていた結衣は、ぱちちりと目を開けた。

上半身を起こし室内をきよるきよると見回してみたが、宿舍の狭い和室には誰もいない。

誰か訪ねて来たのかと思つて扉の方に注意を向けても、何の音もしなかった。窓の外から、木々の枯葉が風で擦すれ合う音が聞こえてくるだけだ。

「気のせいか……」

結衣は自分の寝ぼけつぷりに苦笑しつつも、念の為、枕元に置いてあったスマホを確認する。着信履歴が無いことにほっとした後、そこに表示されている時間を見た。

アラームをセットしてある時刻まで、あと十五分しかない。

(寝直すには微妙だし、起きるか……)

少し損をした気分になりながら、結衣は支度を始める。

室内は暗いが、近くに置いてあった作業着を彼女は迷わず手に取った。毎晩寝る前に、決まった場所に畳んで置いていたからだ。

座ったまま作業着の上着に袖を通したところで、ふと先程まで見ていた夢を思い出す。

見渡すばかりの青空の下、どこまでも広がる緑の草原。その真ん中に結衣は立っていた。空を見

上げると、銀色に輝く星が一つ降ってくる。

結衣はそれを受け止めようと両手を広げたが、そこで目が覚めてしまった。なぜあんな夢を見たのかは分からないが、星が手の中に降ってくるなんて、何だか縁起が良さそうだ。

「今日は、何か良いことがあるのかな」

そう思ったら、少し早く目が覚めてしまったことも気にならなくなった。

「よし、今日もワンコのお世話を頑張るぞ」

小声で自分に活を入れ、結衣は鼻歌を歌いながら着替えを再開した。

「おはよう、ラッキー。今日もよろしくね！」

結衣が声をかけると、檻の中で伏せていたラッキーは、黒く優しそうな目で彼女を見上げた。そしてすぐに立ち上がり、元氣よく尻尾を振る。

そんなラッキーに、結衣はにっこり笑い返した。

この犬を預かったのは、夏の終わり頃だった。あれからもう二ヶ月が経つ。

最初は警戒心を露わにしていたラッキーだが、今は結衣や他のトレーナーにすっかり慣れた。また訓練の甲斐あって、滅多なことでは吠えなくなっている。

元々吠え癖を除けば、賢くて優しい犬なのだ。当初の予定通りあと一ヶ月は預かる予定だが、迎えに来た飼い主の喜ぶ顔を見るのが結衣は楽しみだった。

（その頃には、私の転職先も決まっているといいんだけど……）

そんなことを思いながら、彼女はラッキーの檻の鍵を開ける。

休日を利用してせつせと転職活動をしているのだが、なかなか上手くいかない。つい溜息が出そうになるが、犬達を不安にさせたくないのでこらえる。

結衣はラッキーの檻に入り、首輪にリードを繋いだ。そして訓練のために、檻の外へ出そうとする。

その時突然、ラッキーが激しく吠え始めた。

「ラッキー、駄目！」

結衣はきつぱりと叱ったが、ラッキーは吠えるのを止めない。壁や天井に向かって吠え続けている。

これ以上叱っても無意味だ。構ってもらっていると勘違いしてしまう。

吠える原因を取り除くのが最優先だと考えた結衣は、ラッキーを刺激するものは何かと、その視線を追った。そして、間の抜けた声を上げる。

「え？」

足元の地面が、ぐにやりと柔らかくなったのだ。

この感覚には覚えがあった。小学生の頃、田植え体験に参加した際、泥に足を取られた時と似ている。自力で動けなくて怖かったことを思い出し、結衣は青ざめた顔で足元を見下ろした。

そこにあったのは、黒い沼だった。結衣が立っている場所を中心に、小さな沼が広がって

いる。

「え？ なにこれ、やだ！」

慌てて、足を引き抜こうともがく。だがもがけばもがく程、足は沈んでしまう。なぜこんな所に沼があるのだろう。何がなんだか分からないが、非常事態ということだけは確かだ。結衣はすっかりパニックに陥^{おと}った。

一方、ラッキーは黒い沼に向かって吠え続けている。

（あ、いけない。リード！）

吠え声で我に返った結衣は、ラッキーのリードを握ったままであることに気付いて手を離れた。この怪現象から、せめて犬だけでも救わなくては。

そんなことをしているうちに、気付けば腰まで沈んでしまっていた。

目の前にいるラッキーは、困ったようにクウンと鼻を鳴らす。そして檻^{かご}の中を右往左往して歩き回ると、開いている扉からおもむろに外へ駆け出した。

「あっ！」

——しまった、脱走してしまう！

結衣は焦ったが、同時に一つの可能性を思い浮かべる。

賢い子だから、助けを呼びに行ったのかもしれない。

「ラッキー、お願い。出来れば誰か呼んできて……！」

そんな風に祈りながら、ぎゅっと目を閉じる。やがて結衣の体は頭まで呑み込まれた。



頭まで沈んだと思った途端、急に息苦しくなった。

驚いた拍子に吐き出した息は、幾つもの気泡になって散らばる。

（なにこれ、水!?）

結衣はもがいた。水の中にいるらしいが、混乱していてどちらが水面か分からない。怖くなって両手をばたばた振り回していると、右腕を誰かに引っ張られた。

ざぼつという大きな音と共に、上半身が水から出て目の前が開ける。そのまま地上に体ごと引き上げられた。

「大丈夫ですか、ドラゴンの導き手殿！」

「げほっ、ごほげほっ」

声をかけられ、結衣は返事をしようとしたが、飲んだ水のせいで激しく咳き込んだ。四つん這^よいの体勢で、必死に息を整える。気管に水が入ったらしく、苦しくて涙が出てきた。

やがて落ち着いた結衣は、助けてくれた人に礼を言おうと顔を上げる。

（え……?）

目の前に立つ恩人の姿に、結衣は息を呑んだ。

（私、もしかして死んじゃったのかな……。天使が見える）

そう疑ってしまう程、その青年は美しかった。

二十代くらいのヨーロッパ系外国人で、背が高くすらりとしている。肌は白く、髪は金色で、エメラルドを思わせる緑の目をしていて、その目を縁取る睫毛も、眉も金色だ。

こんなに完成された美貌を間近で見たのは、生まれて初めてだった。いや、テレビや雑誌でも見たことがない。まるで天使の彫像が動いているかのようだ。

だが青年の背に翼はなく、服装はかなり変わっていた。

中世を思わせる紺色の上着と白のズボンを身に着け、肩に赤いマントを掛けている。コスプレのような違和感もなく、驚く程馴染んでいた。とはいえ、現代にあってこんな格好を日常的にしている人はいないだろう。もしかすると、何かの祭りに参加しているのかもしれない。

結衣がそう自分に言い聞かせたところで、青年が心配そうに顔を覗き込んできた。

「ドラゴンの導き手殿？」

そこで結衣は、先程の質問を思い出した。そういえば、大丈夫かと問われていたのだ。

「だ、大丈夫です！ それより、ち、近い！」

青年の顔があまりに近くて仰天した結衣は、反射的に彼を押し返した。

「あつ、失礼」

青年は謝って、一步後ろに下がる。

距離が開いたことで、ひとまず結衣がほっとしていると、青年の後ろから別の青年が顔を出した。長い黒髪と琥珀色の目を持ち、黒ずくめの服装をしている。彼もまた整った容貌をしているが、な

んだか冷たそうだった。金髪の青年が太陽なら、黒髪の青年は月といったような、真逆の印象である。共通しているのは、髪の一房を選び分けて、色の付いた紐を結んでいることくらいだ。

黒髪の青年は結衣と目が合うと、会釈をする。

「ようこそリヴィドール国へ、ドラゴンの導き手様。あなた様のご来訪、心よりお待ち申し上げておりました」

そう言って、彼は右手を左胸に当て、恭しくお辞儀した。大袈裟な挨拶だが、気品があつて美しく見える。

「は？」

対する結衣の返事は間抜けなものになった。青年の仕草に見とれてしまい、言葉の内容を遅れて理解したせいだ。

先程から奇妙な呼ばれ方をしている。それも当たり前のように。だが何もかもが意味不明なので、どこから突っ込んでいいのか分からない。

放心状態の結衣に、黒髪の青年が促す。

「どうぞこちらへ。お召し替えなさいませんと、お風邪を召されてしまいます」

「オスカーの言う通りです。ご婦人が体を冷やすのは良くないと聞きます。すぐに着替えなさいと。」

さあ、行きましょう」

金髪の青年が至極もつともだという風に頷き、結衣に左手を差し出す。流れるような動作だったので、結衣は思わず右手を載せてしまった。

そこで我に返り、慌てて手を引っ込める。すると金髪の青年がおや、と言わんばかりに片方の眉を跳ね上げた。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ あの、あなた達はいったい誰で、ここはどこ……ここ？」

ようやく周りに目を向けた結衣は、自分の目に映ったものが信じられず、辺りをきよきよと見回す。

結衣は今、小さな泉の縁ふちに立っていた。目の前には、そこへ下りるための階段があり、青年達はその一番下の段に立っている。階段は白大理石で出来ており、頑丈そうだ。更に視線を上げると、同じく白大理石で造られている重厚な趣おもむきの神殿があった。

続いて結衣は後ろを振り返る。泉の周囲には草木が植えられ、その向こうには高い壁がそびえていた。それは映画などでよく見る城壁のように立派だった。遠くに見える空を、虹色に輝く小鳥が飛んでいくのを見送ったところで、結衣は青年達に視線を戻す。

「……ほ」

「ほ？」

青年達が同時に首を傾げた。

「本当にどこですか、ここ！」

結衣は耐えきれずに叫んだ。

まったくもって理解不能である。

さつきまで自分は、山の中にある犬の訓練所にいたはずだ。実際は毎日掃除をしていて清潔だが、

古びているせいで小汚い印象のある犬舎。あれはどこに行つたんだ。可愛いワンコ達はどこだ。

半ば混乱していたが、見知らぬ他人に丁寧な言葉を使う程度の理性は、かろうじて残っていた。

そこで結衣は思い出す。犬舎でラッキーの世話をしていた、黒い沼に落ちたことを。

(きつとあそこから夢なんだ。きつとそうだ)

結衣はあまり賢い方ではない。犬についての勉強は大好きだが、中学や高校のテストでは平均点を取るのがやっとだった。今でも教科書や参考書を見ると頭痛がする。深く考えるのは苦手だ。

そんな結衣なので、この時も考えることをあつさり放棄した。これは夢だと決めつけて、泉の方を再び振り返る。

水面に映る自分は、癖のある黒髪のショートヘアと大きな丸い目のせいで、実年齢より幼く見えた。そして、訓練所にいた時と同じ紺色の作業着を着ている。見覚えの無い、オカリナに似た笛が首にかかっている以外は全ていつも通りだ。

今の状況とそぐわないその格好を見て、確信した。

——間違いない。変な夢を見ているのだ。

結衣は手っ取り早く目を覚ますため、勢いよく泉へ飛び込んだ。

「驚きました。まさかご自分から泉に突っ込まれるとは……。大丈夫ですか？ ああ、いえ、分かっております。大丈夫ではありませんね。ひどく混乱されている、それは確実です」

バスタオルにくるまってガタガタと震える結衣に、黒髪の青年が心配そうな顔で言った。

「これが夢じゃないなら、そりゃ混乱しますよ……」

そう返す結衣の声には覇気が無い。泉の水の冷たさによって、これが夢ではないことを、嫌でも理解せざるを得なかったせいだ。

結衣はつい先程起こったことを思い出す。

飛び込んだ泉は胸辺りまでの深さしかなく、溺れることは無かった。体がどんどん沈んでいき、気付けば犬舎の中にいるということも無かった。泉の真ん中で呆然と立ち尽くす結衣を、金髪の青年が引き上げ、用意してあったバスタオルを渡してくれたのだ。

そして今、結衣はこうして震えている。

日本でいえば秋くらいの気温なので、濡れば寒いのは当然だった。

「このままでは、本当にお風邪を召されてしまいます。さあ、こちらへ」

黒髪の青年はそう言って、神殿のような建物へと案内する。

意味不明な状況に未だ混乱しているが、風邪を引くのはごめんだ。結衣は金髪の青年と共に、黒髪の青年の後に続いた。

建物の中は、とても広かった。薄暗い廊下を、壁につけられた燭台しよくたいの明かりを頼りに進みながら、結衣は遠い目をした。

何故かというと、魔法陣のようなものが書かれた燭台の上に、光の玉が浮いているからだ。それが、薄暗い廊下を照らしている。

(あれ、どう見ても宙に浮かんでるよね……。意味分かんない)

おかしいことばかり起きているが、今感じている寒さは本物だ。そこまで考えた時、結衣の頭に突拍子もない考えが浮かんだ。

(ここは明らかに日本じゃない。それどころか、もしかして私……異世界に来てしまったんじゃない?) それはもはや、ほとんど確信に近かったが、結衣は認めたくなかった。だから否定してもらえないことを期待して、黒髪の青年を問い詰める。

「ねえ、ちよつと訊いてもいいですか? 私は日本の片田舎にある訓練所にいたのに、なんで西洋文明のど真ん中にいるんですか? あなた達のその古臭い格好は、お祭りじゃないなら何? それにそこら中にあるオカルトじみたものは、いったい何なの!？」

結衣は一息にまくしたてた。だが黒髪の青年は至って冷静に、淡々と応じる。

「セイヨウ文明というのがどこの文明かは存じ上げませんが、我々の名譽のために言わせて頂ければ、この服装は古臭くなどありません。むしろ最新の流行です。そして、お祭りだからこんな格好をしているわけでもありません。『オカルト』というものも存じませんが、周りにあるのは魔法を用いた照明器具です。燃料は魔石ませきになります」

「えっ、魔法!？」

「何ですか、急に」

いきなり大声を上げた結衣に驚いた様子で、黒髪の青年が僅かに身を引いた。結衣は慎重に確かめる。

「魔法って、えーと、箒ほうきで空を飛ぶとか、人を蛙にするみたいな術のこと?」

「まさか。魔法で空を飛ぶことは出来ません。せいぜい少しの間、宙に浮く程度です。そもそも、何故箒ほうじで空を飛ぶのか分かりませんね……。箒は掃除用具では？ それに、変化の魔法はせいぜい髪の色を変えるくらいで、かなり熟練した者でも目の色を変えるのがやっとです。動物に化けるなんて、とても……」

「他には何ができるの？」

「魔法には戦闘で使うものと、生活に使うものがあります。その照明器具は、生活に使う魔法の代表的なものですね」

「あなたも魔法を使えるんですか？ 良かったら見せて下さい！ 見たい！」

だんだん興奮してきた結衣は、黒髪の青年に頼み込む。魔法なんて目にしたらここが異世界であることを認めざるを得なくなるが、見られるものなら見てみたかった。だが、黒髪の青年は首を横に振る。

「駄目ですよ。神殿内では緊急時以外、魔法の使用は禁止されていますので。ここは魔法を使わずに生活する、修行の場でもあるのです」

「そうなんですか」

文明の利器を使わず、山ごもりをするような感覚なんだろうかと、結衣は首をひねる。

「でも、あの明かりも魔法なんですよね？」

「あれは必要な道具ですから、例外です」

結衣はなるほどと頷いて、更に質問する。

「魔法を使う時って、呪文を唱えたりするんですか？」

「もちろん唱えますよ。魔力に効果をもたせるためには、意思を込めた言葉を口にする必要がありますから。当たり前のことでしょう？ まあ、呪文の代わりに魔法陣を使う場合もありますが……。しかし、何故そんなに魔法について知りたいのですか？」

黒髪の青年は怪訝けげんな顔をする。

結衣がどう答えようか考えていると、金髪の青年がやんわりと口を出した。

「オスカー、ドラゴンの導き手殿の住んでいた所には、魔法使いがいなかったのかもしれないよ」「ああ、なるほど。都市部でなければ、そう多くいませんから、不思議ではありませんね。魔法使いになるには、知識と訓練が必要です。教師のいないような所にお住まいだったのでしょ」

黒髪の青年は納得した様子を見せる。

（まあ、一人もいないんだけどね……）

結衣は心の中で呟いた。どう説明すればいいか分からなかったので、金髪の青年が取り成してくれて助かった。

金髪の青年は見れば見る程優しそうだし、柔らかい笑みが、結衣のささくれ立った心を癒いよしてくれる。溺れかけたところを助けてくれたのが彼なので、恋愛でいう吊り橋効果みたいなものかもしれないが、きっと良い人だと思う。

彼は壁の照明器具を示して、結衣に訊きく。

「ドラゴンの導き手殿には、ああいった物も珍しいのですか？」

「え、ええ、はい。でも似たような物は、私が住んでる所にもあるんですよ。そっちは電気で動くんですけど」

「デンキ？」

「うーん、雷の力って言えばいいのかな」

「なるほど、あなたの一族は雷を操るんですね」

「いやそんな大層なものじゃないです……」

ファンタジー世界の住人らしい解釈に、結衣は苦笑いする。だが金髪の青年が楽しそうなので、まあいいかと思つて流すことにした。それに、気になることがある。

「ところで、さつきから何なんです？ その呼び方」

「どれですか？」

「ドラゴンの導き手、つてやつです」

結衣がずばり問うと、二人の青年は顔を見合わせた。そして黒髪の青年が答える。

「それについて説明する前に、お召し替え下さい。長話をしていると、お風邪を召してしまいますから」

そう言うなり、黒髪の青年は近くの部屋の扉を開けた。そして、結衣を中に押し込む。

「お前達、この方の着替えを頼むぞ」

中にいたのは、白い帽子とローブを身に着けた六人の女性だった。それぞれ金髪、銀髪、茶髪に赤髪と、帽子の下からカラフルな髪が覗いていて、結衣は花畑にいるみたいな気分になる。髪だ

けでなく、目の色も青や緑や茶色と様々だった。だが、みんな肌が白く、彫りの深い顔立ちをしている。

彼女達は、ぱつと花が咲くような笑みを浮かべ、結衣のもとへ近寄ってきた。

「まあ、この方がドラゴンの導き手様なのですか？」

「小柄で可愛らしい方！ 初めまして。私どもは、こちらの神殿に仕える神官でございます。お会い出来て光栄ですわ」

笑顔で歓迎してくれる彼女達につられて、結衣も笑みを浮かべる。

「ど、どうも」

思わずべこりと会釈えしやくしてしまうのは、日本人の悲しい性さがだ。結衣の笑みを見て、彼女達の熱気は更に高まった。

「こちらこそ、どうぞよろしくお願いします！」

「さあこちらへ、ドラゴンの導き手様！」

「まずはお風呂に入りましょう。こんなにお体を冷やされて、おいたわしいですわ！」

「え？ え？ ちょっと待って」

獲物を見るような目を向けられて尻込みする結衣に、金髪の青年は爽さわやかに笑つてみせた。

「彼女達はあなたの味方ですから、ご安心下さい。ではまた後でお会いしましょう、ドラゴンの導き手殿」

「私達は一度失礼します。——さあ参りましょう、陛下。あなた様にもお召し替え頂かなくては。

お風邪を召されたら公務に差し支えます」

「ああ、分かっているよ。オスカー」

そんな会話を最後に、青年達は扉を閉めた。

残された結衣は、狼の群れに放り込まれた兎うさぎさながらの心細さを覚えた。いつそのこと逃げ出してしまいたい。

だがその願いは叶わず、わけが分からないまま、風呂場へと連れていかれた。

一時間後、ようやく白ローブの女性達から解放された結衣は、ぐったりしていた。

ずぶ濡れの衣服は洗濯すると言って取り上げられたので、彼女達に用意してもらった服を着ている。首には今も、オカリナのような笛を下げていた。

結衣は一人の女性に先導されて廊下を歩きながら、長い袖を指先で摘まんで溜息ためいきを吐く。

（まさか、家族でもない人達に服を着せられるなんて……。着物とかなら分かるけど、この服なら自分で着られるのに）

今の結衣は無地の白いシャツと紺色のロングスカート、そして紺色の靴を身に着けている。見た目はシンプルだが、非常に着心地が良い。きつと上等な服なのだろう。

彼女達は風呂で結衣を洗おうとしてきたが、それは断固として拒否した。必死に説得してようやく引き下がってもらったものの、お陰で精神的に疲れている。

前を歩く白ローブの女性の背中を眺めていたら、風呂場での苦勞を思い出して、結衣はうなだれ

た。そこで、女性が足を止める。

「こちらでございます。すぐにお茶をお持ちいたしますね」

白ローブの女性は白木の扉をノックした後、すつと押し開いて結衣を中へ通す。その白い石造りの部屋には大きな窓があり、開放的で広々としていた。応接室みたいな場所なのか、中央に青い敷物が敷かれ、同じ色の長椅子と白木のローテーブルが置かれていた。そこに、泉で会った青年達がいる。

彼らと話せということだろうか。結衣が意図を探るように女性を振り返ると、彼女はお辞儀をして扉を閉めた。

仕方なく、結衣は部屋の中央へ進む。

金髪の青年は長椅子に座っており、黒髪の青年はその左横に立っていた。黒髪の方が、結衣に向かいの長椅子を示して言う。

「お疲れ様です、ドラゴンの導き手様。どうぞお掛け下さい」

「はい……」

結衣はそちらへ向かいながら、そういえば金髪の青年が、「また後で」と言っていたなと思い出す。そして何かしらの説明を受けられるに違いないと期待して、金髪の青年に対面する形で座る。彼は仕事でもしていたのか、テーブルに広げていた紙束を纏まとめて隅に寄せた。

結衣はその紙を盗み見てみたが、何が書いてあるかは分からなかった。そこに並んでいる文字はアルファベットに似ていたが、英語とは全く違う言語のようだ。

結衣が椅子に落ち着いたところで、先程の女性が部屋に入ってきた。彼女はテーブルにお茶を並べると、すぐに出ていく。

黒髪の青年に手振りで飲むように勧められたものの、結衣は口を付ける気にはならなかった。白磁のカップに入った赤茶色のお茶からは良い香りがしているが、毒が入っていないとも限らないからだ。

結衣が途方に暮れた顔で二人の青年を順番に見ると、金髪の青年が優しい口調で言った。

「今の状況が、さっぱり理解出来ないというお顔をしておいですね。お気持ちはよく分かりますよ。不安だとは思いますが、まずはお互いに自己紹介をしましょう。私はアレクシス・ウィル・リヴィドール三世と申します。アレクと呼んで下さい」

金髪の青年——アレクは、にこやかに笑う。結衣はその笑顔に思わず見とれながら、名前を呟いた。

「アレク……さん？」

「はい、よろしくお願います」

結衣が名前を呼ぶと、アレクは一層嬉しそうに笑った。

癒し効果抜群の笑みを前に和んでしまった結衣は、慌てて表情を引き締める。アレクの持つ魅力のせいか、それとも彼が纏う穏やかな空気のせいか、危うく警戒心をなくしてしまうところだった。今の状況がよく分かっている上に、この人達がどんな人間かも分からないというのに。彼らもし犯罪者だったらどうするんだと、結衣が頭の中で自分を叱咤していると、今度は黒髪の青年が

名乗った。

「私はこの国の宰相を務めさせて頂いております、オスカー・レドモンドと申します。どうか、私のことはオスカーとお呼び下さい」

アレクとオスカーは、期待を込めて結衣をじつと見つめる。

結衣は迷ったものの、意を決して口を開いた。

「結衣です、菊池結衣。あつ、ここだと、たぶんユイ・キクチかな。ユイでいいです」

彼らが名前で呼ぶように言ってくれたので、結衣も無難に合わせておいた。嫌になったら、後で訂正すればいい。

アレクは不思議そうに、結衣の名を呟く。

「ユイ、でよろしいんですか？ 聞き慣れない響きですが、可愛らしいお名前ですね」

「いえ、そんな、日本ではありふれた名前です。でもありがとう」

それは社交辞令ではなく、純粹な感想のようだった。だから結衣は謙遜しつつも、礼を言う。名前を褒められるのは嬉しいものだ。

（アレクさんってモテそう。格好良いのはもちろんだけど、こうやって自然に褒めちゃうところとか）

ただ、これほど面と向かって褒められたことがない結衣には、ちょっとばかりむずがゆい。

アレクは結衣にもう一度にっこり微笑みかけると、すっと姿勢を正し、右手を左胸に当ててお辞儀した。

「改めまして。ユイ殿、ようこそリヴィドール国へ。ドラゴンを教え導く存在であるあなたの来訪を、心から歓迎します。どうかそんなに警戒なさらず、楽になさって下さい。我々はあなたを絶対に傷つけないと誓います」

「は、はい」

ひとまず、結衣は頷いた。

今のところ自分の身は安全であるらしいと思えたが、それでもまだ混乱している。質問したいところが山程あるが、何をどう訊けばいいかわからない。

(なによ、ドラゴンを教え導くって。——え？ ちよつと待って、ドラゴン?)

結衣の頭の中に、火を吹く恐ろしいドラゴンの絵が浮かんだ。

(いや、まあ、魔法があるんだし、ドラゴンが一匹くらいいても不思議じゃないのかもしれないけど……。わけ分かんないなあ、もう。あれ、そういやリヴィドールって、さつきも聞いたよかな……。あー！)

そこで、先程のアレクの自己紹介を思い出す。

「アレクさんの名前にも、リヴィドールについてましたよね。ここじゃピュラーな名前なんですか?」

結衣が何気なく訊くと、オスカーが呆れ果てた様子で言った。

「この方はリヴィドール国の現国王だからです」

「は? 王様?」

結衣は目を瞬かせる。そして、アレクを上から下まで眺めた。

「でもアレクさん、王冠を被ってない……」

「王冠は特別な儀式や式典の時くらいしか被りません。重くて動きづらいですから」

アレクが微笑み、目を細めて答える。

彼には煌びやかなオーラがあると結衣にも感じられるが、それでも王だとは信じがたい。結衣が王と聞いて連想するのは、上から目線の偉ぶったオジサンだ。穏やかで優しいようなアレクとは真逆である。

「本当に? 本当に王様なんですか?」

「はい」

「私、こんな風に普通に話しちゃってますけど、いいんですか? いきなり無礼者って言われて、牢屋行きになったりしないですよね」

結衣の言葉に、アレクは目を丸くした。

「まさか。ドラゴンの導き手であるあなたを牢に送れる者など、この国にはいません。私とて同じです。あなたは聖童が選んだ導き手。私にとっても敬うべき方なのです」

「はあ……」

そんなことを、当たり前のように言われても困る。結衣は啞然として、アレクの顔を見返した。どうもピンときていない様子の結衣に、オスカーが苦笑する。

「よく分からないという顔をしておいですね。まずはあなたが今置かれている状況と、これから

私どもがお願いしようとしていることについて、お話ししましょう」
「そこでようやく、オスカーによる説明が始まった。

——ここでは古来より、人間と魔族が戦争を繰り返してきた。

好戦的な魔族が人間の土地へ攻め入ってくるので、その度に人間達は、魔法の力と団結力によって、それに対抗してきた。

だが一度、人間が減ぶぎりぎりのところまで魔族に侵攻されたことがある。その時、神に遣わされた聖竜が現われて、人間達を救った。

それ以来、聖竜は絶えず遣わされている。彼らは人間の中から盟友と呼ばれる相棒を選び、その人間と共に戦うのだ。

人間達は聖竜に感謝し、やがて、聖竜を神の使いと崇める聖竜教会が出来た——

「この神殿は、その聖竜教会の本部です。この部屋は、応接室に当たります」

オスカーの話聞いた結衣は少しの間、黙って考えた。そして自分がちゃんと理解できているか確かめるため、彼に問いかける。

「本部っていうのはつまり、セイリュウ教会という宗教の一番大事な場所ってことですか？」

「ええ、そうです。ここには聖竜教会で最高位に座す教会長がいらつしやいますし、優秀な人材も多く揃っています。この国に数ある神殿の中でも、一番重要な施設です」

オスカーはそこで一度息を吐き、きっぱりと言った。

「この教会には、聖竜の寝床があるので」

それまでほとんど無表情だった彼の顔に、初めてはつきりと感情が表れた。畏敬と親しみを混ぜ合わせたような、そんな感情だ。

彼の横にいるアレクがどこか誇らしげに頷くのを見て、彼らにとつて『セイリュウ』が重要な存在であることは結衣にも分かった。だが、それがどんなものかは全く想像できず、思わず右手を上げて話を止める。

「待つて待つて……ちよつとごめんなさい」

オスカーは常識のように語っているが、結衣にしてみれば、へんてこりんな神話にしか思えない。彼女は指先で額を押さえて頭痛をこらえた。

「その、セイリュウって何ですか？」

結衣の質問に、青年達はきよんとした。だが、すぐにアレクが苦笑しながら答える。

「聖竜は聖竜ですよ。聖なるドラゴン、月神セレナリアの使い——そんな言葉を、一度は耳にしたことがあるはずです。ユイ殿は、その聖竜に選ばれた人間なのです」

今度は結衣の方がきよんとする番だった。

「えっと……そもそもドラゴンって、トカゲに羽が生えたような見た目で、口から火を噴く伝説の生き物のことで合ってます？」

ドラゴンと言えばそれしか思い浮かばないし、お伽話に出てくる生き物だとばかり思っていた。

それだけに、現実には生きていられると言われても、どうもピンと来ない。

すると、アレクが嘔き出した。

「伝説ですって？　どんな田舎にも、野良ドラゴンの一頭くらいはいるでしょう？」

「野良？　そこらをうろついているってこと？　駄目だ、全然イメージできない」

結衣が頭を抱えていると、オスカーがふと気付いた様子で質問する。

「ユイ様、先程のニホンというのは、町の名前でしょいか？」

「え？　いえ、国の名前です。東の果てにある国、つてよく言われます」

「東の果ての国、ですか。東にある国で、そのような名の国は聞いたことがあります。それに魔法を見て驚いていたことや、ドラゴンを知らないことを考えると……。なるほど、あなたはこことは違う世界から招かれたのですね。そういった導き手の例が、文献にもあります」

興味深そうに結衣をじろじろと見ながら、オスカーが何度も首肯する。すっかり自分の考えに納得している彼に対し、アレクは怪訝な顔をしていた。

「まさか異界人だと言うのかい？　オスカー。よく見た方が良いでしょう。彼女の耳は獣の耳ではないし、肌が鱗で覆われてもいない。手に水かきがあるようにも見えないよ。もしそう見えるなら、医者と呼ぶから遠慮なく言ってくれ」

そんな風に見えたら、確かに医者が必要だろう。アレクの言葉に、結衣はもつともだと頷いた。するとオスカーが、むっとして眉を寄せる。

「真面目な顔で失礼なことをおっしゃらないで下さい、陛下。私はまだ、頭も目も耄碌もうちやくしていません

ん！　私が思うに、彼女は这个世界の人間と、よく似た人間が住む世界からいらしたのでしょ

「ああ、なるほど。本の挿絵に出てきた異界人は我々とは全く違う姿をしていたから、そんなことは思いつきもしなかったよ」

アレクはそこで、ようやく納得がいったようだ。

「話が全然かみ合わないし、子どもでも知ってる昔話を知らないから、なんだかおかしいとは思っていたんだ」

なるほどなるほどと何度も頷くアレクに、結衣はそろりと右手を上げて問いかける。

「えっと、何なんです？　獣の耳とか、鱗とか、水かきって」

そんなの、人間というよりモンスターではないか。

すると、勘違いしていて申し訳ないと謝ってから、アレクが説明する。

「今まで異世界からおいでになった導き手は、どの方も異形の持ち主だったのです。獣の耳を持つ方、肌が鱗で覆われた方、手に水かきを持ち、一日の半分を水の中で過ごさないと乾いて衰弱してしまう方など……。けれど、あなたはあんまりにも普通なので、全く気付きませんでした」

普通と言われて、これ程嬉しいと思ったのは初めてだった。もし最初から異世界人扱いされていたら、結衣はキレていたかもしれない。

「へえ、色んな世界があるんだ……。面白いなあ。SF映画みたい」

前に見たスペースアクションものの映画を思い浮かべて、結衣は呟いた。その映画には色んな人種が出てくるので、ああいうものかとなんとなく理解する。

「エスエフエイガ、ですか？」

「あー……ただの独り言です」

興味を示すアレクに、結衣は適当に返した。上手く説明出来る自信がなかったのだ。それよりも、結衣は異世界人のことをもつと詳しく知りたくて、話を元に戻す。

「他には、どんな人がいたんですか？」

「その他は、この世界の人間ばかりです。と言つても、文献に残っている導き手の情報は今お話ししたことくらいで、詳細は不明なのです」

アレクがそう説明すると、オスカーが補足した。

「人間が魔族と戦争を繰り返してきたというお話を、先程したでしょう？ 過去の導き手の記録は戦争により、ほとんど失われたのです。魔族はとにかく破壊を好むので、後に残るのは荒野ばかりです。人間は彼らに奪われた領土を、聖竜と共に少しずつ取り返していき、アレクシス陛下の祖父に当たる初代国王の手によって、ようやく全て取り戻したのですよ。初代国王のお力によって、荒れ果てた大地はこのように緑溢れる土地に戻り——」

話すうちに熱が入り始めたオスカーは、話が横に逸れたことに気付き、咳払いをした。

「とにかく、数少ない文献によれば、異世界から来た導き手は、どの方も変わった見た目をしていたらしいのです。念のために確認いたしますが、ユイ様ご自身は、異世界から来たと思われませんか？」

「たぶんそうだと思います。私にはまだ信じられないんですけど、私がいた所には、魔法もドラゴ

ンも存在しませんから。……でも、やっぱり夢なのかな。異世界の人と、こんな風に普通に話せるわけないし……」

「ああ、それは聖竜様のお力です。導き手を召喚した際、こちらの世界にすぐ馴染むようにして下さるんだそうですよ。言葉が通じるのもそのためですし、水が合わなくて体を壊すといったこともなくなるそうです」

「なるほど……」

オスカーの説明は、納得のいくものだった。でなければ、半日は水に浸からないと弱ってしまう異世界人は、とてもじゃないが生きていけなかっただろう。その異世界人に比べれば、結衣にとつて、この世界は遥かに快適だと思えた。

「言われてみれば、お二人共どう見ても外国人なのに、日本語が通じてますもんね。混乱してて気付きませんでした」

そのことに気付いてみると、まるで映画の日本語吹き替え版を見ているような気分になった。

「ユイ殿は心がとても柔軟でいらっしやるんですね。私がこんな突拍子もない話をされたら、きつと騒いだり暴れたりして、面倒を起こしていますよ。さぞかし不安でしょうに、こうして静かに話を聞いて下さっている。ありがたいことです」

自分がその立場になったことを想像したのか、アレクはしかめ面をした。彼は、自分のことを親身になって考えてくれている。結衣にはそう思えて、アレクの印象が更に良くなった。結衣が癩癩かんじやぶを起こさず大人しくしてられるのも、アレクの纏まとう穏やかなオーラのお陰かもしれない。

「いやいや、まだ混乱してますよ？ でも魔法なんて見せられたら、受け入れるしかないです」
結衣は苦笑した。結衣の中の冷静な部分が、ごねるよりも現状把握が先だと告げているのだ。
だから深呼吸し、気を取り直す。

「ところで、さつき私は聖竜に選ばれたって言ってましたよね。それってどういう意味なんです？」
「はい、先程の話には続きがあるのです」
オズカーはそう言っつて、説明を再開した。

——聖竜は、死期が近付くと卵を産む。そして、その卵が孵るには、ドラゴンの導き手が必要だ。
人間の味方をするために、神から遣わされた聖竜。彼らが人間と上手く共生できるように、選ばれた人間の手で慈愛をもつて育てられる必要があると、神が考えたからだと言われている。

だから聖竜はドラゴンの導き手を召喚し、自分の傍に引き寄せる。そして大人になるまでの間、ドラゴンの導き手から様々なことを教わり成長していくのだ。

聖竜教会は聖竜の希望を汲み、導き手が何不自由なく暮らせるように手助けしてきた。そして今日に至る——

「あなたはその、ドラゴンの導き手なんです」

アレクはそう断言した。

結衣は目を閉じて、頭を抱える。

「ひとまず導き手がどういうものかは分かりましたけど、何なんですか、その神に遣わされたとか言うのは……。まさか神様が実在するなんて言いませんよね？」

その言葉に、アレクが怪訝な顔をする。

「あなたの世界には実在しないんですか？」

「へ？」

結衣は啞然とした。

「いや、信じるか信じないかは人によりますけど、実在してるかどうかは分からないから、宗教間で揉めていて……って、その言い方だと、この世界には神様が実在するんですか!？」

信じられないという態度を隠さない結衣の問いを、アレクは肯定する。

「ええ、いらっしやいますよ。ただし百年に一度、降臨祭の時のみ、お姿を現されるのです。常にいらっしやるわけではありません」

「姿を見せるんですか？ 神様が？」

尚もしつこく問う結衣。彼女がオズカーの方を見ると、彼も頷いた。

「そうです。この世界には光を司る双子の女神——太陽神シャリア様と月神セレナリア様、そして夜闇を司る男神ナトク様がいらっしやいます。ですが、降臨祭の時にいらっしやるのは双子の女神様だけです」

「夜闇の神様は来ないんですか？」

その問いに、もちろんだと言わんばかりに頷くオズカー。

「ええ。夜闇の神は月神に懸想^{けんそう}して彼女をさらったことが原因で、双子の妹を奪い返しにきた太陽神により、地底に封印されたのです。以来、太陽神と夜闇の神は敵対しています。月神は二柱に挟まれて困っているそうです」

「いや、困ってるって……」

それでいいのか、月神様。結衣は思わず心の中でツツコミを入れた。

「我々人間は、光の女神様達によって生み出された存在です。夜闇の神は嫌がらせとして魔族を生み出し、人間を滅ぼそうとしてきました。ですが、月神が聖竜をお遣わし下さったので、滅びずに済んでいます。しかし聖竜は、元々は天界の生き物です。生まれた瞬間から人間の味方をするわけではありません。そこでセレナリア様は、聖竜を正しく導けるように、人間の中から代表を選ばせることにしたのです。その代表というのが、幼い聖竜に人間を慈^{あはれ}しむ心を教える『ドラゴンの導き手』と、聖竜と共に戦う『盟友』です」

「私がその『盟友』なんです。先代の聖竜エルマーレ様は、私の父を盟友に選びました。そして父が亡くなった後のために、私を次の盟友に選んだんです。ほら、これがその証^{あかし}です」

アレクは自分の左手の甲にある赤い紋様を見せた。三日月を背負うドラゴンの絵が、そこにあった。

結衣は自分の両手をまじまじと見てみたが、何も無い。

不思議がる彼女に、オスカーが教えた。

「導き手の場合は、その竜呼びの笛が証です。他のドラゴンをしついたり呼んだりするのもその

ような笛を使いますが、あなたが持つ物は特別で、聖竜を呼ぶことが出来る唯一の笛なのです。あなた以外には吹けないんだそうですよ」

「そうなんですか……」

使い方は謎だが、ひとまず結衣は納得した。この世界に來た時、いつの間にかこの笛を持つていた理由が分かったからだ。

「ユイ様には聖竜だけでなく、他のドラゴンをも導く力があるとされています」

オスカーが続けて言った。

「他のドラゴンも？」

結衣は聞き返したものの、教えられることが多すぎて、だんだん頭が回らなくなってきた。だが、これだけは訊いておかなければ。

「何で私なんですか？ 私、そんなドラゴンなんてものを導くような立派な人間じゃないですよ。

平凡な一般人で、ただのドッグトレーナーで、得意なのは犬の訓練だけで……」

「失礼ですがユイ様、ドッグトレーナーとは何ですか？」

指折り数えて平凡さをアピールする結衣に、オスカーが質問する。結衣はきょとんとして、目を瞬^{しんぱた}かせた。そしてドッグトレーナーについて説明しようとした時、ふと疑問が浮かぶ。

「こちらの世界には、犬はいますか？ これくらいの動物で、ワンワンと吠える……」

「ええ、おりますよ。主に狩猟犬や牧羊犬として使います。家庭犬として飼う地域もあるそうです」

「良かった。ドッグというのは私の世界の外国語で『犬』という意味です。トレーナーは『訓練士』です。つまり私は、犬の訓練をする仕事をしてるんです。だからドラゴンとか、そんなすごい生き物を育てられるのかなって……」

結衣は困り顔でアレクを見たが、彼も困った顔をしていた。

「申し訳ありません、私にも聖竜の考えまでは理解出来ません……」

アレクはそう言つて首を横に振つたものの、すぐに穏やかな微笑みを浮かべる。

「ですが、分かっていることが一つあります」

アレクは自信に満ちた顔で言つた。結衣はごくりと唾を呑み込む。何を言うつもりなのかと少しビクビクしつつ、彼を見つめる。

「な、何ですか？」

「聖竜が導き手として選ぶ人間は、情に厚い、優しい方ばかりだということです」

ストレートに褒められた結衣は、ぼかんとした後、顔を赤くした。照れと恥ずかしさと、同意したら自意識過剰ではないかという考えが、一気に頭の中を通り過ぎる。

結衣は慌てて首を横に振り、否定した。

「そ、そんなことは……」

「いざれ分かることですよ。私どもは聖竜の選択に、間違いが無いことを知っています。それで充分なのです」

「……そうですね」

それ以外にどう答えろと言うのか。返事に詰まった結衣は、結局頷くしかなかった。だが、とても良い人だと言われればなしでは気まずいので、他の話題を探す。そして、はっきりさせておきたいことが一つあるのを思い出した。

「聖竜を選んだっていうことは、私をここに連れてきたのは、あなた達じゃないんですね？」

オスカーが首肯する。

「ええ。我々に出来るのは、導き手の召喚を早めるために、卵の中にいる聖竜に呼びかけることだけです。実際に召喚するのは聖竜です。人を別の場所から呼び寄せる魔法は存在しますが、高い魔力と魔法センスが必要なので、使える者はごく少数です。世界を渡るとなると成功例はありません」

「失敗談なら山程ありますが、詳しく聞くのはオススメしません。どれもこれも惨たらしい話なので。それでも聞きたいですか？」

心配そうに問うアレクに、結衣はぶんぶんと首を横に振つた。

「そんな話、しなくていいです！ その聖竜が私を呼んだことは分かりましたけど、私つていずれば元の場所に帰れるんですか？」

これこそが、結衣が一番訊きたかったことだ。

すると、アレクは大きく頷いた。

「もちろん帰れますよ。聖竜が大人になったら、呼ばれた日と同じ時間、同じ場所に戻れるらしいです。前の聖竜がそう言っていました。仕事を終えると、導き手殿には女神から幸運がプレゼント

されるとも聞いています」

「幸運……」

なんだ、お金がもらえるってわけじゃないんだ、と結衣は心の中で呟いた。結衣の勤務する訓練所は、給料がとても少ない。幸運などという曖昧なものより、バイト代をもらえた方が助かるのだが……

まあ、帰れるだけで良しとしておこうと結衣は思った。下手に我が儘を言って、帰れなくなったりしたら困る。

「ユイ殿」

アレクに呼ばれて結衣がそちらを向くと、彼は神妙な顔をしていた。そして溜息を吐いて言う。

「見知らぬ土地に呼ばれ、心細い思いをしていらっしやるあなたに頼るのは大変心苦しいのですが……今、この国はとても危うい状態にあります」

「え？」

「魔族と人間がたびたび戦争をしていると、先程話したでしょう？ 二ヶ月前に一つの戦争が終わり、今は休戦中なのです。先王——私の父はその時の傷が原因で亡くなり、卵を産んだばかりだった聖竜も疲弊して亡くなりました。その戦いではこちらが勝ったので、先王の喪に服す期間として三ヶ月間の安全は得ましたが、その後どうするかはあちら次第です」

結衣は青ざめ、慌てて口を挟む。

「ちょっと待って下さい！ どうして今そんな話を？ 私に今すぐ聖竜と一緒に戦ってこいでも

言う気ですか？ 冗談じゃない！」

身の安全を保障すると言っていたのは、嘘だったのか？

興奮する結衣を宥めるように、今度はオスカーが言った。

「まさか。あなたを危険にさらすことは絶対にありません。ただ、そういう状況なので、我々は儀式をしてあなたの来訪を早めたのです。そして、あなたにもそれを理解した上で、聖竜のお世話をして頂きたいのですよ」

「ああ、そういうこと……」

結衣は心底ほっとした。

つまり、彼らはこう言いたいのだ。聖竜が幼いままだと国の防衛力が落ちて危ないから、出来るだけ早く聖竜を一人前にして欲しいと。

アレクは心底申し訳なさそうに顔を歪め、結衣を見つめる。

「随分勝手なことを言っていると、分かっているのです。少数の軍勢が相手なら私だけでも対応出来ますが、大軍相手となると、聖竜がいないのは大きな痛手になります。聖竜が傍にいるのではないのでは、軍の士気も変わってきますから」

アレクの言っていることは分かる。無敵のヒーローが傍にいて、一緒に戦うのだと思えば心強いだろう。逆に、いつもいるはずのヒーローがいなかったら？ 結衣だったら、思わず逃げたくなくなりそう。

「ユイ殿、あなたの身に何か起きたとしても、私が持てる力の限り、あなたを守ると誓います。で

すから、どうか力を貸して頂けませんか？」

ひどく真剣な緑の目が、結衣をまっすぐに見つめている。

結衣は無言で頷いた。

果たして自分が急いだところで聖竜の成長が早まるのかどうかは知らないが、やれるだけやってみよう。

世界のためだとか人間のためだとかそんなことよりも、目の前の青年の気持ちに応えたいと、結衣は思った。こんな風に一生懸命になれる人となら、なんとかやつていけそうな気がする。それに日本に帰るためにも、やるしかないだろう。

そこで結衣は、すっと席を立つ。

「分かりました。とにかく、やれるだけのことはやってみます。私はドッグトレーナーで、ドラゴンのトレーナーなんてしたことありませんけど、きつとどうにかかりますよね」

そう冗談まじりに笑いかけると、アレクは明るい笑顔を見せてくれた。そんな彼に、結衣は扉を示す。

「じゃあ早速、聖竜の卵の所へ行きましょう」

「はい！ ありがとうございます、ユイ殿」

「感謝いたします、ユイ様。些細なことでも構いません、何か分からないことがありましたら、いつでも訊いて下さい。私も協力は惜しみませんよ」

アレクとオスカーも立ち上がり、結衣を案内するために扉へ向かっていく。

（よく分からないけど、やってみるしかない。頑張ろう！）

ドラゴンなんて見たこともないし、少し怖いという気持ちもある。だが、結衣は元々かなり前向きなタイプなので、一度やろうと決めたらそれしか見えなくなるのだ。

結衣は二人の後を追う、聖竜の卵があるという部屋へ向かった。



細やかに彫り込まれた白木造りの扉を開けた先に、聖竜の寝床はあった。人気がなく静かな場所で、空気がひんやりとしている。

「広い所ですね」

結衣は周囲を見回した。

「成長した後も、聖竜が過ごす場所ですからね。聖竜は空を飛べるようになると、あそこから出入りするんですよ」

アレクがそう言つて、天井を指差した。

白い石造りの部屋の天井は高く、部屋の奥だけが吹き抜けになっている。結衣が天井を見上げると、そこには大きな穴がぼつかりと開いていた。その穴から注ぎ込む光が、室内を明るく照らしている。

そのまま下へと視線を移した結衣は、床に置かれた石製の台座に、銀色に輝く巨大な卵があるの